

---

# メイドさんの出番です!!

紫乃 華陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイドさんの出番です！！

### 【Nコード】

N8818Y

### 【作者名】

紫乃 華陽

### 【あらすじ】

パン屋の娘から、急遽噂の”白い伯爵”の元で働く事となった楓。そこには、「金目狙い」などという言葉は無くして平和であった。だが、ある日の事。楓がすっかりメイドの生活に慣れて来た頃に、突然伯爵が誘拐されてしまった。いつもの根気と気合で伯爵を助けに行くと言っのだが・・・。

## メイドライフの幕開け（前書き）

少々コメディ方向へと書き換えました。台詞が多い所も有りますが、どうぞ広い心で見てください。

## メイドライフの幕開け

とある街の屋敷には、街で噂の”白い伯爵”が居たそうだ。その伯爵は未婚のため、やはり女性陣には財産を狙って働きに来る者も少なくは無い。そこでその伯爵は自ら雇用するようにし、体力、知力、忍耐力のある女性を選んだそうだ。

最近こいずみかえでは女性、というよりは少し若い女子を雇用したらしい。名前は小泉楓。出身も育ちもこの街であり、生まれ持った体力がある。パン屋の娘からいきなりメイドにならないかとスカウトされた時は、彼女も断ろうと思っていたが親に押し切られ、噂の”白い伯爵”の屋敷の前で今現在佇んでいるのだ。

確かにパン屋よりは給料も良いとは思うが、面接も無しにメイドにならないかと言われても戸惑うのは当然である。だからと言って、折角の誘いを断るのも少し悪いと思い、本人も決意したらしい。

大きな門の右側の呼び鈴を鳴らすと、屋敷の中からは若い執事とメイド長らしき人物が現れた。二人とも二十代後半から三十代程に見える。二人は楓の前に来るとにこり微笑み、

「小泉楓さんですね？お待ちしておりました。」と執事の方が言っ

た。  
「私は篠田と申します。執事長を勤めております、よろしくお願

い致します。」  
「雪野です。メイド長を勤めております、これからよろしくお願

い致しますね。」  
軽い自己紹介をして二人は楓を中へと案内した。

楓は、庭に綺麗に咲き誇っている薔薇を見渡していた。ここが一般庶民とは違う所などと考えていた。その間に、無駄に大きい扉の前に到着していたのだ。

あまりの大きさに楓は目をぱちくりさせる。そんな楓を雪野は可愛いものを見るようにふふと笑いながら見ていた。

家の中も今までに見た事が無いような広さで、ここを伯爵一人が支配していると思うとどれだけ偉大だかを楓は思い知った。そのため、伯爵への挨拶へ行く途中で左右に顔を動かしてばかりいた。

「ご主人様のお部屋はずつと奥にあります。後で雪野さんが他の部屋について教えてくれると思いますので、なるべく早く慣れてくれればと思っております。」

「は、はい……。」  
自分にとっては慣れない広さだったために、心底不安も抱いていた。そんな楓の背中を雪野は軽くぽんぽんと叩いた。

「ご、ゴッドマザー……!!」

そう言いたくなかったのは抑え、楓は一人で感動していた。この頃から楓にとって雪野は”神のような母親”になったのであった。

「ご主人様、楓さんをお連れしました。」

さっきまでの緊張のほぐれはまたピンと張り、中からの返事が来るのが少し怖かった。何故なら楓の脳内では、『伯爵』真面目で怖い』というイメージがあったからである。だが、中からの返事は思ったよりも明るく、少し幼い高い声だった。

「どうぞ、入って下さい。」

その声を聞いた楓はホツとした。

ドアが開いて、視界に現れたのはちゃんとした青年。ブロンドの髪に白いスーツを着ていて、まるで天使を思わせるような……童顔だった。(恐らくハーフ。)

そんな伯爵を見た楓は驚いた。立った時同年位の身長ではあるのだが、顔が幼い声も幼い。イメージとは全く違ってはいたものの、全く逆の存在だったのだ。

「初めまして、私は神宮寺琥珀じんぐうじこほくと申します。今日からよろしく、楓さん。」

そう言うてにつこり笑った。とても驚いていた楓だが、とりあえずお堅い挨拶をして琥珀の部屋から出た。

「どうでした？伯爵は。とても可愛らしい人だったでしょう？」

「こら、雪野……。」

「あら失礼。」反省の色は無く雪野はクスクスと笑っていたのだ。

挨拶した後は、篠田が言ったように雪野が部屋の案内をした。

部屋はアパート一部屋の二倍くらいで、タンスやクロゼット、バス  
タブにベッド、机などと必需品が揃っていて一人分の部屋にしては  
快適だった。

「ここが貴女の部屋です。今日のお仕事は、貴女の部屋を整理する  
事から始めましょう。」

「解りました。」

「部屋にあるものは好きに使っていいですからね。」

と言い、雪野は楓の部屋から出て行き、他のメイド達に指示を出し  
ていた。

「さて、始めますか……。」

まずは、藍色の制服（メイド服）を着て、エプロンを着けた。エプ  
ロンは現代向けなのか、フリルが付いていて可愛いデザインだ  
った。制服は古風である。カチューシャを着けたら、まずは鞆に入  
っている寝巻きや下着、念のためにある普段着をタンスの中に入れ  
た。クロゼットにはコートと今日来ていた上着と鞆を入れた。

机には、メイドのためのマニュアル本と羽ペンが乗っていた。引き  
出しには日記帳があり、『ここに本日あった事を記しておく事』と  
書いてあった。大分丁寧である。

部屋も意外と小奇麗で、掃除なんてたまにすればいい位の綺麗さで  
あった。

やる事を無くした楓は、雪野の元へ行き何かする事がないか尋ねた。  
「そうですね……。では、図書室と資料室に本を運んでいただ  
こうかしら。」

きちんとした初仕事に、楓はやる気を見せた。

「任せて下さい！……で、その本は何処にあるのですか？」

すると雪野は「ここですわ。」といい、ダンボールに詰められていた新書を楓の前へ運んでいった。

「此方は図書室。で、此方が資料室への本です。少しずつでいいので運んでいただけないかしら？」

その本の山を見た楓はたたりと汗を流したが、初仕事で、しかも力仕事なので気合を入れ直した。

「分かりました。頑張ります!!」

そう言うとき雪野は心配顔から笑顔になり、「よろしくね。」と部屋を後にした。

「うーん・・・十冊ずつ持っていけば平気かな・・・。」

両方百冊、計二百冊程ある。力仕事が得意な楓だが、流石に多量だ。持てる分だけ持って行き、図書室の本は全て片付いた。そして、資料室へ運んでいく途中だった。

「手伝いましょうか？」

後ろから声がした。横にひよこつと顔を覗かせたのは、琥珀だった。「伯爵!? だ、大丈夫です。力仕事は得意なので。それに伯爵に持たせる訳にはいきません・・・。」

と遠慮する楓に対し、

「伯爵じゃなかったらやらせてくれるの？」笑いながら、楓の後に続いた。いつの間にか敬語じゃなくなっていた。

「え、それは・・・あ、ああ!!」

バランスを倒してしまったのか、後ろに転倒しそうだった。それを、丁度後ろにいた琥珀が支えたのだ。

「大丈夫?・・・やっぱり手伝った方が良かったんじゃない?」と笑った。

「ほ、本当に大丈夫ですから!!」

と言ったが、琥珀は言う事を聞かずに半分以上の新書を持った。

「伯爵、私が雪野さんに怒られますから・・・!」

「平気だよ。僕が言っておくから。」

何を言っても手伝う気ではないので、楓は諦めてしまった。

資料室は掃除をしていないのか、埃っぽくあまり綺麗とは言えなかった。

「ここ、掃除をされていないんですね……。大丈夫なんですか？」

「いいんだ。ここは結構プライバシーに関わる場所だから、あんまり人を入れたくないんだ。」

「そうなんですか……。」

二人が新書を入れ終えた時、琥珀が言った。

「ここには、今まででは僕以外に篠田さんと雪野さんしか入れた事ないんだけど、君は雪野さんに頼まれたから特別だね。」

「そ、そうなんですか?!」

「うん。だから、今度からはここに入って来ていいからね。後、掃除も頼もつかない。」そういつて、また笑顔を見せた。

「……。いいんですか、本当に……。」

「ああ。あんまり弄らなければね。じゃ、僕はここで調べたい物があるから。」

「あ、はい。失礼しました。」

楓は納得がいかなかった。琥珀と雪野と篠田しか入れた事の無い資料室に、何故自分だけ入れたのが疑問に思った。だが、何もわかりそうにないのでとりあえず、その問題は放置した。

その事に深入りするのもしけない気がしたため、他はもう聞かない事にした。

「雪野さん。終わりました。」

「早いですね。ずるでもしましたか？」

その笑顔が恐ろしい。

「い、いいえ、色々やり方を考えながらやっていたもので……。」「と楓は苦笑するしかなかった。

流石に、伯爵に手伝ってもらったなどと言う訳にもいかない。本当は処罰をうけなければいけないはずだったが、思わぬ結果になってしまった事を楓はそこで後悔した。

「後はもう無いと思います。他のメイド達にもう色々やっていたので、後は皆さんと一緒に食堂へ行って下さい。」

「分かりました。」

食堂は長い廊下を渡った先にあり、雇われているメイドは少数なのに食堂は広いのだ。楓が恐る恐る中に入ってみると、中には十五人中八人程のメイドがもう先に座っていた。

「あ！新人さんだ！」

一番最初に反応したのは身長の小さいメイドだった。

「楓ちゃんって言うんだよね？私は優奈ゆなっていうの。よろしくね。」と笑って見せた。

「よ、よろしく……。」

「こら、新人さんを困らせちゃ駄目でしょ？」

次に近づいてきたのは眼鏡の三つ編みの女の子だった。

「私は咲さき。ごめんね、この子がいきなり……。」

「ううん、大丈夫。よろしくね。」

二人が近づいてきたからか、他のメイド達もわんやわんやと集まってきた。

明るい性格からしつかりした性格までのメイド達が自己紹介を始めてきたのだ。先程の優奈は十六で、咲は十八。大体は楓と近い年の子ばかりであった。

「ふう、終わった……。ん？」

「何々？一体何事？」

「新人だつてさ。」

最後の三人が入ってくると、楓の周りを囲んでいたメイド達は急いで自分の席へ戻った。

楓は何が何だかわからない様子だったが、とりあえずその三人にも挨拶をした。

「楓です。今日からここで働く事になりました。よろしく願います。」

目の前にいた三人は、一瞬驚いたもののすぐに笑顔になり、

「よろしく。私は副メイド長の七海<sup>ななみ</sup>。」

「私はメイドの中の幹部生って所かな？実花<sup>みか</sup>だよ。よろしくね。」

「同じく、幹部生の歩美<sup>あゆみ</sup>です。よろしく。」

食事を食べ始め、三人と慣れ親しんだ後は普通に会話をしていた。

「へえ、メイドにも位があるんだね。」

「そりゃ、メイド長とかいつかは辞めないといけないからね。その後誰になる？ってなったら困るでしょ。だから、こういう風に副メイド長、メイドの幹部みたいにしてるの。」

「だから、皆ささつと離れたんだ。」

「そういう事。でも、普通に話していいからね。分からない事があつたら何でも聞いてね？」

「ちよつと図々しいかもしれないけど、そうさせてもらうね。」

こうして、食事の時間は楽しく過ごせたのだという。

それぞれ、自室に戻ったメイド達。楓はお湯の入ったバスタブに身を沈めながらメイド達の名前を覚えていた。

「結構覚えるの大変だな……。慣れれば大丈夫だと思うけど。」

最初に来た時の不安は嘘だったのかと思う程に、次の日を楽しみにしていた。

入浴を終え、寝巻きに着替えた後は記録帳（日記帳）に出来事を書いて寝た。

『メイドライフの幕開け』という見出しから始めて……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8818y/>

---

メイドさんの出番です!!

2011年11月26日15時52分発行